

令和3年度 前期常設展

## 地元紙からみる

# 1964年東京オリンピック・ パラリンピック

## はじめに

昭和39(1964)年、長年にわたる招致活動が実を結び、アジア初となるオリンピック・パラリンピックが東京で開催されました。

東京オリンピック・パラリンピックに関連する出来事は、『いわき民報』や『常磐毎日新聞』といった、いわき地域で発行された新聞でも多く報じられていました。そこからは、「スポーツの祭典」への大きな期待が伝わってきます。

今回の常設展は、当館が所蔵する当時の地元紙を通して、東京オリンピック・パラリンピックの際の、県内における聖火リレーの様子や大会の様子、本市にゆかりのある選手の活躍や盛りあがりを見せる市内の様子について紹介します。

いわき市立いわき総合図書館

## 東京オリンピックまでの道のり

日本が初めてオリンピックを招致したのは、昭和15(1940)年の第12回大会です。昭和15年が、神武天皇即位紀元2600年に当たることから、祝賀行事の一環として招致計画が持ち上がりました。昭和11(1936)年のIOC総会において、第12回大会の東京での開催が決定しましたが、翌年、日中戦争が勃発し、時局がひっ迫していったことにより、昭和13(1938)年、開催決定からわずか2年で大会の返上が決定しました。

戦後、日本は国際社会への復帰を目指し、その手段のひとつとして、再びオリンピックの東京招致に乗り出しました。そして、昭和35(1960)年の第17回大会に立候補しましたが、IOC総会での投票の結果、イタリア・ローマでの開催が決定しました。

日本は、この総会の2カ月前に来日したブランデーJOC会長(当時)の助言を参考に、第17回大会の東京開催が実現しなかった場合は、昭和39(1964)年の第18回大会の招致を行うことが決定していたことから、ただちに招致活動を開始し、昭和34(1959)年のIOC総会において、欧米の3都市を破り、東京での開催が決定しました。これにより、アジアで初めてのオリンピックの開催が実現しました。

## 聖火リレー

国内の聖火リレーは、第1～4コースに分火し日本全国をリレーした後、東京都で再びひとつに集めるという形がとられました。

昭和39(1964)年9月7日に那覇空港に到着した聖火は、沖縄本島の前半部をリレーした後に分火、第1～3コースの起点へ空輸されリレーされました。分火の後、沖縄本島の後半部をリレーしていた聖火は、熊本県庁において第1コースの聖火と合わせられました。

また、第3コースの聖火は、青森県庁において、日本海側を南下する第3コースと太平洋側を南下する第4コースに分火されました。福島県における聖火リレーは、第4コースに含まれ、宮城県から国見町に入り、中通りを南下して西郷村から栃木県へと渡されました。

東京都に到着した各コースの聖火は、一度東京都庁で保管された後、10月9日に皇居前広場で行われた集火式でひとつに集められ、翌10日に東京オリンピック開会式が行われている国立競技場に向かいました。

### 聖火リレーコース

#### 第1コース 9/9-10/9

鹿児島県→熊本県→長崎県→佐賀県→福岡県→山口県→広島県→島根県→鳥取県→兵庫県→京都府→福井県→石川県→富山県→新潟県→長野県→山梨県→神奈川県→東京都

#### 第2コース 9/9-10/8

宮崎県→大分県→愛媛県→高知県→徳島県→香川県→岡山県→兵庫県→大阪府→和歌山県→奈良県→京都府→滋賀県→三重県→岐阜県→愛知県→静岡県→神奈川県→東京都

#### 第3コース 9/9-10/7

北海道→青森県(青森県庁で分火)→秋田県→山形県→新潟県→群馬県→埼玉県→東京都

#### 第4コース 9/9-10/7

(青森県庁まで第3コースと重複)→岩手県→宮城県

#### 福島県

9/28 国見町→桑折町→伊達町(現伊達市)→福島市

9/29 福島市→松川町(現福島市)→安達町(現二本松市)→二本松市→大玉村→本宮町(現本宮市)→日和田町(現郡山市)→富久山町(現郡山市)→郡山市

9/30 郡山市→安積町(現郡山市)→須賀川市→鏡石町→矢吹町→泉崎村→白河市→西郷村

栃木県→茨城県→千葉県→東京都

### 展示記事

『福島民報』昭和39(1964)年9月28日1面「聖火、今日本県入り 三日間で一一八キロ走る県境・国見で引継ぎ」

『福島民報』同年9月29日1面「“ようこそ聖火”本県へ 県庁前で大歓迎式」

『福島民報』同年9月30日1面「“聖火”にわく開成山 歓迎の県大会 歓声と大合唱点火でムード頂点に」

『福島民報』同年9月30日1面「鼓笛隊の声援も 人垣ぬい四号国道リレー 福島一郡山」

『福島民友』同年10月10日1面「国内リレー四つの火 皇居前で集火式」

## 東京オリンピックの記念貨幣

東京オリンピックを記念し、日本初の記念貨幣である100円と1,000円の銀貨が発行されました。

100円銀貨のデザインは公募され、応募総数30,512点の中から選ばれました。決定した図柄は、表は聖火台と五輪マーク、裏は太陽と100の数字を重ねたものでした。

1,000円銀貨のデザインは造幣局が製作したもので、表は富士と桜花、裏は五輪マークと桜花です。

100円銀貨8,000万枚、1,000円銀貨1,500万枚が製造され、金融機関等の窓口で数回に分けて両替えが受け付けられました。

当時の新聞記事では、長蛇の列ができたと報じられており、人気のほどがうかがえます。



東京オリンピック記念 100円銀貨  
左：表面 右：裏面

### 展示記事

- 『いわき民報』昭和39(1964)年9月12日2面「五輪記念百円銀貨が着く 21日銀行郵便局で交換」
- 『常磐毎日新聞』同年9月15日1面「五輪記念の百円銀貨」
- 『いわき民報』同年10月29日1面「五輪千円銀貨に人気殺到 朝三時からの座り込みも」

## いわき地域の記念イベント・記念物いろいろ

いわき地域では、商店の記念セールをはじめとして、「平市マラソン大会」などの大会開催や平駅(現いわき駅)の駅前大通りに設置されていたグリーンベルトへの造花のもみじの設置など、オリンピック開催を記念した多くのイベント等が行われました。

また学校では、運動会でオリンピックにちなんだ競技が行われた他、記念石(川部中学校・川部町)の寄贈や、学校の創立記念と合わせ、児童の遊び場として「オリンピック山」(高坂小学校・内郷高坂町)の制作などが行なわれました。



『常磐毎日新聞』  
昭和39(1964)年11月16日 3面

### 展示記事

- 『常磐毎日新聞』昭和39(1964)年9月3日3面「オリンピック記念セール! [藤越・平市]」
- 『常磐毎日新聞』同年9月7日2面「秋空の下で熱演 各地で運動会くりひろげる」
- 『常磐毎日新聞』同年10月14日1面「五輪ムードで一ぱい 30米道路にもみじ記念植樹」
- 『いわき民報』同年10月19日1面「初のマラソン大会 平市オリンピックを記念」
- 『常磐毎日新聞』同年10月27日2面「立派な人間育成 川部中で五輪記念の石」
- 『常磐毎日新聞』同年11月16日3面「オリンピック山 高坂小で建設進める」

## オリンピック 地域ゆかりの選手の壮行会

いわき地域にゆかりのある、バスケットボールの志賀政司選手、重量挙げの古山征男選手・大内仁選手が、東京オリンピックへ出場することが決まり、選手の壮行会が、それぞれの出身地等で盛大に行われました。「郷土の代表」として多くの期待が寄せられたことが伝わってきます。

### 展示記事

『常磐毎日新聞』昭和 39(1964)年 9 月 17 日 1 面「頑張れ！おらが郷土の五輪代表」

『いわき民報』同年 9 月 17 日 5 面「志賀政司選手がんばれ！元気な姿で壮行会」

『いわき民報』同年 9 月 19 日 1 面「重量あげに日の丸を 東京五輪」

## 東京オリンピック開催

開催期間：昭和 39(1964)年 10 月 10 日～10 月 24 日

競技数：20 競技 種目数：163 種目

参加国(地域)数：94

出場選手数：5,558 名 (うち日本：354 名)

日本の獲得メダル数：金 16 銀 5 銅 8 合計 29

### 展示記事

『常磐毎日新聞』昭和 39(1964)年 10 月 10 日 1 面

「世紀の祭典 東京五輪開く 頑張れ郷土の代表」

『福島民友』同年 10 月 11 日 3 面 [開会式の様子の写真]



『常磐毎日新聞』  
昭和 39(1964)年 10 月 10 日 1 面

### いわき地域ゆかりの選手

名前	出場競技	いわき地域との関わり
志賀政司	バスケットボール	平市(現いわき市平)出身
古山征男	重量挙げ(バンタム級)	常磐市(現いわき市常磐湯本町)出身
大内仁	重量挙げ(ミドル級)	福島県立小名浜水産高等学校 (現県立小名浜海星高校)出身

敬称略

バスケットボールに出場した志賀政司選手は、6 位入賞を目指して健闘しましたが、9・10 位決定戦でオーストラリアに惜敗し、10 位という結果となりました。

重量挙げバンタム級に出場した古山征男選手は、階級をフェザー級から 1 階級落としての出場で 6 位入賞を果たし、同じくミドル級に出場した大内仁選手は、銅メダルを獲得しました。これは、東京オリンピックに出場した福島県に關係する選手の中で、初めてのメダルでした。

### 展示記事

『常磐毎日新聞』昭和 39(1964)年 10 月 12 日 1 面「よくぞやったり 重量あげ古山選手六位入賞」

『常磐毎日新聞』同年 10 月 15 日 1 面「あっぱれ大内銅メダル お家芸の威力をいかに発揮  
堂々の五輪タイ 両親の眼前で日の丸掲げる」

『福島民友』同年 10 月 24 日 5 面「江川、志賀が大活躍 日本 10 位 身長差に泣く」



## 芸術展示と花柳登代蔵氏

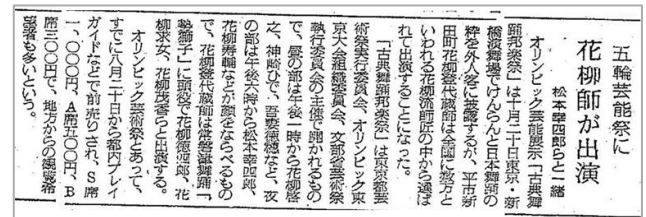
芸術展示とは、オリンピックに付随して開催される芸術分野の展示企画のことです。これは、昭和23(1948)年のロンドンオリンピックまで行われていた、スポーツを題材にした彫刻や絵画等のコンクール、「芸術競技」から変化したもので、東京オリンピックでも開催されました。

芸術展示は、昭和31(1956)年のメルボルンオリンピックから公式に行なわれるようになりましたが、スポーツを題材としている点は変わりませんでした。しかし、東京オリンピックでは、題材を限定せずに「わが国第一流の芸術を展示する」という方針を打ち出して開催されました。

東京オリンピックの芸術展示は、美術部門4種目(古美術、近代美術、写真、スポーツ郵便切手)と芸能部門6種目(歌舞伎、人形浄瑠璃、雅楽、能楽、古典舞踊・邦楽、民俗芸能)の合計10種目が展示・上演されました。その中の「古典舞踊・邦楽」には、当時、平市(現いわき市平)に住んでいた、日本舞踊の花柳流師範・花柳登代蔵氏が出演しています。

花柳氏は、平市(現いわき市平)に花柳流の舞踊稽古所を構え、多くの弟子を教えるかたわら、「平小唄」や「内郷小唄」といった曲の振り付けなど、いわき地域において精力的な活動を行っていました。

「古典舞踊・邦楽」は、10月16日から20日の5日間にわたり新橋演舞場で上演され、花柳氏が出演したのは、20日の夜の部の常磐津舞踊「勢獅子(きおいじし)」でした。



『いわき民報』昭和39(1964)年9月19日 1面

### 展示記事

『いわき民報』昭和39(1964)年9月19日1面「五輪芸術祭に花柳師が出演 松本幸四郎らと一緒に」  
『いわき民報』同年10月24日2面「登代蔵師の踊り25日に放映 五輪芸術展、教育テレビ」

## 大会後の選手の表彰

10月24日の閉会式をもって、15日間にわたる東京オリンピックの全プログラムが終了しました。重量挙げにおいて、銅メダルを獲得した大内選手と6位入賞した古山選手は、福島県教育委員会から「特別体育功労賞」を受賞しました。この賞は、県スポーツ界の振興に寄与した人を表彰する「体育功労者」の表彰規定を準用し新設された表彰制度です。

### 展示記事

『いわき民報』昭和39(1964)年10月23日5面「古山、大内に特別体育功労賞 県教委が別格表彰新設」  
『福島民友』同年10月25日1面「サヨナラ東京オリンピック 新記録いっぱい世紀の祭典おわる」

## 東京パラリンピックまでの道のり

パラリンピックの原点は、昭和23(1948)年、イギリスのストック・マンデビル病院でルードヴィヒ・グッドマン医師が行った、車いすの患者によるアーチェリー大会です。この大会は、グッドマン医師が、ストック・マンデビル病院に入院していた、第二次世界大戦での負傷兵に対するリハビリテーションとしてスポーツを採用し、入院患者のみによる大会を開催したものです。

その後、国際大会として発展していき、昭和35(1960)年に開催されたローマオリンピックの後に、同じローマでの「国際ストック・マンデビル大会」の開催が実現しました。このローマ大会が、後に

「第1回パラリンピック」と位置付けられています。

4年後の昭和39(1964)年、東京大会でも、ローマ大会と同様にオリンピックの後に開催国での「国際ストック・マンデビル大会」開催が決定しました。しかし、東京大会では、従来の「国際ストック・マンデビル大会」のような車いす使用者に限定した大会ではなく、すべての障がい者が参加できる大会を目指し、第1部は従来どおりの車いす使用者による国際ストック・マンデビル大会、第2部は国内の全ての障がい者と西ドイツの招待選手が参加する大会という2部制での開催が実現しました。

また、東京大会では、初めて「パラリンピック」という名前が大会の公称として使用されています。この「パラリンピック」とは、「パラプレジア(対まひ者)」の「オリンピック」というところから名付けられたものでした。この名称は、昭和60(1985)年に正式名称となり、その頃には、大会の発展に伴い「パラプレジア(対まひ者)」のオリンピックという意味ではそぐわなくなっていたことから、「パラレル(もうひとつの)」オリンピックと解釈するようになりました。

## 東京パラリンピック開催

### 東京パラリンピック 第1部

開催期間：昭和39(1964)年11月8日～11月12日

競技数：9競技 種目数：144種目

参加国：21カ国

参加人数：378名（うち日本：53名）

メダル数：金1 銀5 銅4 合計10

#### 展示記事

『福島民報』昭和39(1964)年11月5日 3面  
「選手村きょう閉村 パラリンピックの準備進む」

#### いわき地域ゆかりの選手

名前	出場競技	いわき地域との関わり
猪狩靖典	卓球	双葉郡大久村 (現いわき市大久町)出身 福島労災病院(内郷綴町)に入院
渡部藤男	卓球	福島労災病院(内郷綴町)に入院

敬称略

猪狩靖典選手と渡部藤男選手は、シングルスでは共にイスラエルの選手に敗れ、一回戦敗退となりましたが、ダブルスでは、シングルスで敗れたイスラエルのペアに準決勝で勝利し、続く決勝でも勝利、金メダルを獲得しました。これは、第1部の国際大会に出場した日本の選手の中で唯一の金メダルでした。



『いわき民報』昭和39(1964)年11月12日 1面

#### 展示記事

『いわき民報』昭和39(1964)年10月27日 6面「パラリンピック選手きまる 労災の渡部さんら二人」

『いわき民報』同年10月31日 5面「身障者五輪でも金メダルを 渡部、猪狩選手の壮行試合」

『いわき民報』同年11月6日 1面「身障五輪選手がけさ出発」

『福島民友』同年11月9日6面「パラリンピック幕開く 笑顔で入場行進 「世界は一つ」を誓い合う」  
 『いわき民報』同年11月12日1面「パラリンピックで金メダル 労災の猪狩、渡部選手」  
 『福島民友』同年11月13日7面「再会約し閉会式」  
 『いわき民報』同年11月14日5面「美智子妃からはトロフィー 渡部、猪狩選手がいせん」  
 『いわき民報』同年11月26日2面「五RCがトロフィーを贈る 渡部、猪狩選手の優勝祝賀会」

## 東京パラリンピック 第2部

開催期間：昭和39(1964)年11月13日～11月14日

種目数：肢体不自由 26種目 視覚障がい 18種目 聴覚障がい 20種目

参加人数：46都道府県と沖縄 475名

### いわき地域ゆかりの選手

名前	出場競技	いわき地域との関わり
蛭田忠	肢体不自由：水泳50m自由形・やり投げ・100m障害競歩	磐城市(現いわき市小名浜地区)出身
小池勝雄	肢体不自由：砲丸投げ・100m競走	好間村(現いわき市好間町)出身
新田春義	視覚障がい：ソフトボール投げ・100m競走・水泳45m自由形	常磐市(現いわき市常磐地区)出身

敬称略

第2部では、いわき地域出身の選手3名全員が、それぞれ1競技で金メダルを獲得しました。蛭田忠選手は水泳50m自由形、小池勝雄選手は100m競走、新田春義選手はソフトボール投げです。福島県の代表選手が獲得した金メダル4つのうちの3つを、いわき地域出身選手が獲得するという快挙を成し遂げました。



『いわき民報』→  
昭和39(1964)年11月14日 5面

### 展示記事

『常磐毎日新聞』昭和39(1964)年11月11日3面「蛭田さんら三人出場 身障者スポーツ大会」  
 『福島民友』同年11月14日6面「皇太子さまがご激励 パラリンピック国内大会」  
 『いわき民報』同年11月14日5面「国内大会で金メダル 郷土の三選手」  
 『いわき民報』同年11月15日3面「金メダル郷土入り パラリンピック小池さんに歓迎陣」  
 『いわき民報』同年11月21日2面「蛭田選手の敢闘たたえる 磐城身障者五輪の歓迎会」

## 参考文献

- ・『いわき民報』昭和 39(1964)年 9 月～11 月
- ・『常磐毎日新聞』昭和 39(1964)年 9 月～11 月
- ・『福島民報』昭和 39(1964)年 9 月～11 月
- ・『福島民友』昭和 39(1964)年 10 月～11 月
  
- ・『第十八回オリンピック競技大会公式報告書 上・下』  
オリンピック東京大会組織委員会 編 1966
- ・『パラリンピック東京大会報告書』 国際身体障害者スポーツ大会運営委員会 編 1965  
(「日本障害者リハビリテーション協会」ホームページより)
- ・「日本オリンピック委員会」ホームページ
- ・「日本パラリンピック委員会」ホームページ
  
- ・『JOA オリンピック小事典 2020 増補改訂版』  
日本オリンピック・アカデミー 編著 2019 R/780.6/ジ
- ・『東京オリンピックと新幹線』 東京都江戸東京博物館 編著 2014 210.7/ト
- ・『東京オリンピック 1964』 フォート・キシモト 編 2009 780.6/ト
- ・『パラリンピック大百科』 コンデックス情報研究所 編著 2017 780.6/パ
- ・『1964 年の東京パラリンピック』 佐藤次郎 著 2020 780.6/サ
- ・『パラリンピックと日本』 田中圭太郎 著 2020 780.6/タ
- ・『中村裕 東京パラリンピックをつくった男』  
岡邦行 著 2019 289.1/カ
- ・『造幣局のあゆみ 改訂版Ⅱ』 造幣局あゆみ編集委員会 編 2018  
(造幣局ホームページより)

令和 3 (2021) 年 7 月 8 日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館



令和 3 年度 前期常設展

「地元紙からみる 1964 年東京オリンピック・パラリンピック」

■会期 令和 3 (2021) 6 月 29 日(火)―11 月 28 日(日)

■会場 いわき総合図書館 5 階 地域資料展示コーナー